

藤原辰史 『戦争と農業』

(二〇二七刊) を読む

吉田武雄

はじめに

藤原辰史のこの書は、新書判で著者も學術書ではないと述べていますが、極めて衝撃的な内容です。氏は、学問を研究室や資料室にこもらせず、市民と共にあるようと努めていられます。第一章でなく、第一講、農業の技術から見た二十世紀、第二講 暴力の技術から見た二十世紀という具合に進み、第六講 講義のまとめと展望で終わります。池澤夏樹氏は「暗い未来に向けて一灯を掲げる好著」と推薦しています。

食堂付属大学という形でなされた講義で、「ここ数年、さまざまな大学外の人々の前で歴史の話の中で、学問の居場所を考え」てアカデミズムの勉強が「現在

進行形の事態と出会って跳ね返った瞬間にようやく産声を上げるのではないかと」という思いを持つと。この姿勢に学びわたしも格闘してみたいと思います。

第一講 農業の技術から見た二十世紀

農業の技術は、その分業化で急速に進みました。著者は、北海道の生家で機械の入らない箇所を田植えした経験からその苦勞を述べ、機械が農民の勞働の苦役から解放した事実を認めます。

トラクター、田植え機、コンバイン、乾燥機、籾摺り機など、多くの農業機械が登場し、農作業のほとんどの部分を機械が担うようになりました。これを「稲作機械化」一貫体系 機械が担うということは、機械を

作る人と修理・維持する人が農業を分担する、ということでもあるのです。

しかし分業はデメリットもあり、それが進むと自分の目が届かないことには知らなくともいいと思つてしまふことがそれです、と指摘します。

筆者は、敗戦直後、叔父の農家に寄留して、田起こし、代掻き、田植え、稲刈りと田の草取りは泥田に這いつくばる姿勢で過酷な苦役でした。しかし米を作つているといふ喜びはありました。

二十世紀の人口増加を支えた四つの技術は、農業機械、化学肥料、農薬、そして品種改良です。技術は単に自然を改変するために人間が使用するのみならず、それを使う人間をも変えることを重視すべきと。

鉄車輪の内燃機関を持ち人が乗れるトラクターは、一八九二年、アメリカで発明され、その有用性が分かるや様々なタイプのそれらが登場します。その魅力は牛馬に餌をやり飼育する労を省き、女性でも操縦できるメリットです。

アメリカでは一耕地に一台のトラクターの合言葉で成功します。これに着目し、ロシアの社会主義化をトラクター普及で進めようとしたのが、レーニンです。

彼の死後、スターリンが権力を握り暴力で耕地整理を行います。耕地が広くなければ効率が悪い。地主は排除され、共同体所有の耕地もコルホーズ、ソホーズ所有に変えます。

しかし、その普及は遅く牛馬が依然として使われ失敗しました。トラクターが農民支配の道具となつたとも。また耕地の暴力による整理は社会に大きな禍根を残して、失敗の根拠と見られます。

アメリカ農業では家畜の使用がなくなると、その糞尿を利用できなくなり、新たな肥料が求められます。それが化学肥料でした。一九〇九年、空中窒素固定法が発明され、二〇年代にはドイツ、アメリカ、日本、と各地に肥料会社が乱立します。その一つが新潟水俣病を生んだ昭和電工です。

三つ目の技術は、農薬です。それは害虫や雑草を作物から駆除するためのもので、殺虫剤や除草剤を含む化学薬品全体を農薬と言います。それは、一九二〇年代には広く使用されます。

少なくとも近代農業の仕組みを維持するためには、農業機械や化学肥料や農薬の生産のために化石燃料を掘り続けなければなりません。そう考えれば、農業は、

環境保護の担い手というよりは、環境破壊の担い手であると言ったほうが現実に近いときえ言えるでしょう。以上三つの技術を統括する技術が品種改良です。なかでも「遺伝子組み換え」技術が席卷しています。

世界の農業の運命を握るバイオ化学企業であるモンサントは、遺伝子組み換え作物の種子の九〇パーセント、を握り、飢餓撲滅を掲げて開発をしています。

それに賛辞を与えているのが、ビル・クリントン、ブッシュ父子などやノーベル賞受賞者ですが、モンサントの実態は知られていません。

第二講 暴力の技術から見た二十世紀

第一次世界大戦の衝撃

四つの技術のうちトラクター、化学肥料、そして農薬は、農業を変えるとともに、戦争のあり方までも大きく変えたのです。ターニングポイントとなったのは第一次世界大戦でした。

その大戦の特徴は、破壊力が大なること、総力戦であることなどです。総力戦は、前線の兵士を無力にするため銃後の機能を破壊する行動に出ます。先の戦争で米軍の空爆で焼土になり、女性・子どもを含む多数

の死傷者を生んだ経験はまた引き継がれています。ロシアとウクライナのいまの戦争が全面戦争と言わないが、よく示しています。

現代の兵糧攻め

銃後への攻撃は経済封鎖で食料や燃料などを得られなくすることもやります。先の大戦では、十代だった私は空腹に耐えられず、お櫃から手づかみで盗み食いをして、ひどい自己嫌悪に陥った体験があります。戦争で食料が不足したときに、最も大きな影響を受けるのは子どもたちであることを肝に銘じなければなりません。」

ドイツではスペイン風邪の死者を除いても七六万人もの餓死者が出たそうです（ドイツの公表）。この大戦後は各国も食の在り方の見直しが迫られました。

トラクターが戦車になり、化学肥料が火薬となったトラクターにキャタピラーをつけたアメリカ製のそれを見た仏と英の軍人と軍需産業がともに民生技術を軍事技術に転用したのです。そして英仏海峡からスイスまで掘られた塹壕を突破しようとするタンク（戦車）が

登場して戦争のありようを変えました。

アンモニアは既に化学肥料として大量生産ができていました。それから硝酸を大量生産して、火薬を砲弾に使います。日本でも日本窒素肥料は水俣や朝鮮に工場を作り、大量生産に昭和電工とともに進みます。

殺す感覚の変化

二〇〇七年、イラクでアメリカ軍のヘリコプターがイラクの民間人を機関銃で殺害している映像記録が流出しました。このヘリコプターは「A H-64アパッチ」と呼ばれる戦闘型ヘリコプターでイラク戦争で実戦投入されたものです。一機六〇億円から七〇億円くらい、いまはボーイング社が生産しています。わたしはこの映像を見て戦慄を覚えました。ある兵士が、銃撃された怪我人を運んでいる民間人を見つけ、「怪我人を運んでいるぞ」と言うと、別の兵士が、「でもやらせてくれよ」と応答して、銃撃後、「車ごと木っ端微塵だ、ハハハ」と笑っていたのです。〈中略〉人の命を奪ったという感覚をもたないまま、民間人を殺したあと愉快に笑うことさえできる。

毒ガスから農業へ

毒ガスもまた第二次大戦で生まれました。斬壕に潜っている兵士を殺傷するため毒ガスが使われます。これはあくまで戦争目的で開発された点が、戦車や火薬と違います。あまりに悲惨な被害に一九二五年、毒ガスや生物兵器は禁止の国際条約が締結されます（ジュネーブ議定書）。

支配者の心に巢食った殺害感覚

ドイツ、フランスで大量に生産された毒ガスは、アメリカの綿花畑に散布されて、害虫駆除という「平和利用」名目で使われました。飛行機で空から散布が主となります。その条約発効までの期間にスペインは植民地、アフリカで反乱に使います。「この『感覚』が、害虫駆除の感覚とあまり遠くないことこそ、二十世紀の支配者側の心に巢食った恐ろしい感覚の特徴があるのだと思います」。

植物工場と原発

植物工場は「建物で囲って自然環境から完全に遮断された農耕空間において、土壌を使わずに細菌を排し

た必要栄養素を含む水溶液を作物に与え、太陽の光ではなくLEDなどの人工光を用い、とくにレタスなど薬物を生産する工場のことです。」自然環境に左右されない、理想的な工場に見られますが、植物学者の小塩海平さん（東京農業大学）は批判的な「だれが植物工場を必要としているのか」（『世界』885号）を表しています。

原子力発電の夜間需要をその工場にリンクする狙い
です。

農業にも兵器にも使える技術

トラクターも化学肥料も、農薬も戦車も、火薬も毒ガスも、すべてが大量に生産されます。人間はそれを使いこなす一方で、それに使われていきます。トラクターのライトを照らせば、人間は夜間でも働かされます。大量の地下資源を使い、頻繁にモデルチェンジされ、大量の処理しにくい廃棄物を生み出し、企業間の競争が、激化します。二十世紀に巨大化した競争の仕組みが、戦争と農業を同時に覆うようになった事実を、そして、いまなおその状況は変わっていません。

第三講 飢餓から二十世紀の政治を問う

暗黒の大陸としてのヨーロッパ

この世紀は、農業史的には、前に見たようにトラクター、化学肥料、農薬、品種改良と発展の時代です。政治史的に言えば、戦争と革命とファシズムの時代でした。英国出身の歴史学者、マーク・マゾワーは、『暗黒の大陸—ヨーロッパの20世紀』（一九九八年）を上梓して、「挫折と失敗、差別と流血に満ちた暗い歴史だった」と描き、決してヨーロッパの民主主義が万全のものでないと述べています。

彼は、ギリシャ近現代史の専門家でナチスが、その文化への猛烈な対抗意識と嫉妬を持っていたので、「北方文化」が大昔に北部ヨーロッパに存在した、と俗説を吹聴し、ギリシャを占領し、強制収容所に抵抗者の多数を入れた。ヨーロッパの辺境ともいえるギリシャから見ると、「ヨーロッパの民主主義が礼節に満ちた文明か」疑問。

かつてヨーロッパがアフリカやアジアの彼らの植民地を「暗黒大陸」と呼んだが、それは自分自身ではなかったかと指摘します。

コンゴ・ロンドン・東京

探検家、スタンレーが、『最暗黒のアフリカにて』（一八九〇年）を書きます。ベルギー国王が彼を雇い調査させて、国王は本国面積の八〇倍の植民地を所有し、ゴムと象牙で莫大な利益を得ます。ブースはロンドンのイースト・エンドが赤道下の人々と同じと描きます。

日本では、小説家、松原岩五郎が『最暗黒之東京』（一八九三年）をだしています。陸軍士官学校、海軍士官学校のあつた近くに「残飯屋」があり、調理過程に出る切れ端やおこげなどを受け、貧しい人に売つた。そこにいわゆる貧民窟が出来た。

第四講 食の終焉

食の問題の根源

食の事件の根源にメスを入れることなしに、解決はできない。

食品の生産・流通・小売・消費の全体（フードシステム）を根本的に変えなければならぬ。鳥インフルエレンザは大規模養鶏から発生する。豚舎、牛舎も同様です。食品管理の労働現場の過酷さも問われるべきです。

世界の食料廃棄の傾向

毎年、世界で生産される三分の一、即ち十三億トンは捨てられています。また食べられる食品が六三二万吨も占めています。

他方に飢餓の人々が数億人もいるのにです。

第五講 食と農業の再定義に向けて

どこまでが食べる行為？

食するという行為は、生命体がたどり、これからも続けていく、とてつもない長い旅の一部に関わる行為にほかなりません。本来、それはとても気の長い行為なのです。

ミミズのように生きる

わたしたちの誰もが、森羅万象の世界に漂う一本の頼りない、しかし食欲なチューブです。「食は、口以前、口からお尻まで、お尻以降という三段階を、微生物の力や別の人間の力を借りながら食物を通過させる現象で」す。

日本農業の危機と田舎の創造性

日本農業は、危機的な状況です。中核を担ってきた

世代がリタイアし、耕作放棄地も増える一方です。農村に住む人も減り続けています。「耕作技能の伝承もままならず、その地方独特の食文化や在来種や農法も消滅し始めています」。農政の基本も定まらず、威勢のいい掛け声だけ聞こえます。

筆者の知人のMさんは、稲作、花き、野菜、果樹と多様な経営を家族でしていますが、自然相手ですから収入が不安定で、その上最近のように燃料、機械の価格が上がりに、苦しいとのこと。

それでも若い人はドローンを駆使したりして、努力していますが、老農家はやめたくないのにやめざるを得ないという人が増えているとも言います。お米の価格を保証することは必須です。

第六講 まとめと展望

まとめは、一言で言えば、少なく育て、ゆつくり運び、長く効く、です。

展望は次の通り。

- ① 企業のだす明白な害には異議申し立てをする。
- ② 有機農業を市場の付加価値でなく、新しい仕組みの要と見直す、微小な生物の働きを手伝う農法です。

③ 種子を地元から選択する（在来種保護）。

④ 微生物の力を最大限に発揮する発酵食品を見直す、人は、有機農法と重なる仕組みを体内に微生物として持っています。

⑤ 食の場所を、家から人々の交流の居場所にする。

人間は、生きものの死骸が通過し、たくさん微生物が棲んでいる一本の弱いチューブで、生命の変化のプロセスの一部であることに存在の基盤を求めること。政治も、経済も、教育も過剰な競争の末に結果をたすのでなく、あるプロセスにとどまっても停滞ではないのです。

（よしだ たけお・所員）

